



・発行者・
京都障害者
スポーツ
振興会

目指せ！世界の頂点を

シッティングバレーボール競技 全日本男子総監督 富田圭造

まずシッティングバレーボールとは、名前のとおり座つたまま（床に臀部の一部をつけたまま）で行うバレーボールです。サーブやブロック、アタック、移動の際に立ち上がったたりすると反則になりません。但しプレーによっては、少しの離床は許されませんが審判の判断により判定されます。コートは、よこ6m、たて10mの長方形をネットが挟み2分され、ネットの高さは男子1.15m、女子1.05mです。使用するボールは、ボールは基本的に国際バレーボール競技規則に基づいてほぼ同じであり、それが加えシッティングバレーボール独自に次の3つのルールがあります。

1 競技者の位置

競技者の位置関係は、臀部の位置によって決められる。（手足はコート外などにあっても良いことになる）

2 リフティング

前述にも記したようにボールを触る瞬間、臀部をコート（床）から浮かしてはなりません。また、移動の際やフリーストレスリーブの場合のみ少しの離床は許される。

3 サーブブロック

前衛は、相手チームからのサーブをブロックすることのできる。「臀部」とは、「上体」のことであり、肩から臀部までの部位をいいます。

日本では、日本選手権などの全国大会や東西での地域大会やリーグ戦などが繰り広げられていきます。障害のある人の種目ではありますが、国内では障害のない人も一緒に参加（プレー）できる大会や障害のない人達だけでチームを編成して参加できる大会などがあります。京都にも京都市障害者スポ

ーツセンターの教室をきっかけに、「京都おたべーず」というチームがあり、各種大会で優勝経験もあり男女とも活躍され、障害のある人もない人もシッティングバレーボールを楽しまれています。今回の北京パラリンピック大会の男子日本代表にも2名の選手が選出され、チーム一同に喜んでおります。

パラリンピック出場まで

北京パラリンピック大会出場、さらにはメダル奪取のために、日本シッティングバレーボール協会から、男子監督の要請があり引き受けました。3年間で世界に通用するチームづくりが始まりました。しかし、2006年の世界選手権では1勝もできず全敗で終わりました。まだまだチームとしては成長段階ではありましたが、「世界との差をまざまざと見せ付けられました」。

しかし、この敗北が我々チームを覚醒させる要因でもありました。その後の合宿は「血のにじむような練習」でありました。そして、「フェスピッククアラールンプール大会で、宿敵韓国を破り北京行きの切符を手にししました。その瞬間は、「ほっと」しましたが、我々は当初からパラリンピックに出場しメダルを取れるようにチームづくりをしてきたのでここからが始まりだと気持ちを切り替えました。

出場を決め、新メンバー

を構成し、毎月1回の合宿を重ね「絆」をテーマに、とにかくボールをつなぐ心の通うバレーボールに取り組んできました。最低でも前回大会の成績を上回り、メダルを目指します。相手は強豪国ばかりですが、日本の粘り、我々が今まで養ってきたものを全てを出し切り、いままでお世話になつた方々や今大会に参加できなかつたスタッフや選手の方まで、悔いの残らないように精一杯がんばりたいと思います。

シッティングバレーボール競技 全日本男子選手 中山要

シッティングバレーをはじめめたきっかけは、事故で障害を持ったことによるリハビリで、障害者スポーツセンターに行つたことです。

職員の方から、「シッティングバレーをやってみないか!？」と誘われ、勢いでやってみると、障害を持つてもスポーツができる！と感じ、それ以来夢中になりました。ひたすらボールを追いかけることで、気持ちよく感じることが今でも鮮明に記憶しています。以降、国内の大会にも参加させていただいたり、国際大会の舞台にまで足を伸ばさせていただいたり・・・。

今回の北京パラリンピックは、そんな自分の集大成でもできると思つています。自分ができること、自分にしかでき

ないこと、そして、今までのものを全部出し切るつもりで挑んでいきます。一番大事な・・・「楽しむ」ことを忘れずに！

シッティングバレーボール競技 全日本男子選手 金田進

シッティングバレーボール、思つてもみながつたこの競技でパラリンピックに出場することになった。20年来の付き合いである監督から、「この、どの付く新人に課せられた役割は『架け橋』選手とスタッフ、障害者と健常者、若手とベテラン、人と人。長年続けてきた水泳やテニス等の経験を活かし、競技者として、苦しみや悩みを聞き、喜びを伝えられればと思う。今回のことで友人知人や会社の方々から、多くの反響や応援があつた。

和をもつて、一戦々悔いが残らないように戦い貴く。そして、もつと多くの人にシッティングバレーボールを、パラリンピックを知ってもらおう。それが出場のチャンスしてくれた監督に、応援の声援に応えることになると思う。

水泳のきっかけは身障国体。シッティングバレーボールはパラリンピック。

何がきっかけになるかわからない。だから面白い。だから止められない。スポーツは。

スポ振ルネサンス(5)

「心でつなぐ活動を！」
京都障害者スポーツ振興会

副会長 水谷 裕

毎回のよう書いています、振興会は、この京都に生まれて37年目に入っています。

ほとんどと言って良いほど色んな面で整っていません。なかつた当初に比べると、今日までの間に、障害のある人々を取り巻くスポーツ環境は、大きく変容してきました。

振興会の事業だけでなく、他の団体が催す障害のある人々関連のスポーツ事業も、格段に増えて来ました。

障害のある人々がスポーツを日常の生活の一端に取り込めるような環境になって来たことは、永年、普及・振興に携わってきたものとして、大変うれしく思います。

このような中で、「アレッ！少し違うんじゃない？」「とか、「少しも変わらないのは何故？」と思う時が、しばしばあります。

それは何かというと、振興会がここまで成長して来るには、ボランティアとして関わってくれた多くのスタッフ等の協力のたまものと考えますが、その数も格段に増えました。

振興会の中核をなすメンバーの諸君は、それらの人たちを、どう捉え、どう位置づけ、どう扱っているのか、一歩駒としてしか扱えてないのと違うのではないか。こういえば、一概に否定をするでしょう。しかし、私には、そういう風に見える場面が多く感じます。

人は、意識の無い物と違い、意識を持つことで、さらに、大きく成長するものなわけではありません。振興会に關わっている人々みんなが、障害のある人々のスポーツへの思い入れを持ち、振興会の活動を支えていくという高い意識を持てるような運営をしてゆかなければ、いくつから多くの事業をおこなっても、ただのこなし事業に過ぎなく、振興会の存在価値というか、意味が無くなるのです。

もう少し言いにくいことを言うとして、「自分に障害があるから、そう思うだけで、それはヒガミと違うの」と言われるかも知れませんが、これもずっと以前から感じてきたことなのです。特に、最近のスタッフの傾向を見ると、障害のない人だけでなく、障害のある人の参画が増えて来ています。それらの人々に対しては、言葉遣いなど対応の仕方や事業の中での位置づけなどの在り方に首を傾げざるを得ない場面に遭遇するのです。

振興会を立ち上げる段階から私などが関わって来た経過もあり、当初から振興会の事業活動のスタッフなどとして何の違和感もなく受け入れられて来ましたし、理事などの役員にもなっています。

しかし、やっぱり何か違うのです。障害のある人々のスポーツを支援する組織なので、障害のあるスタッフがいって当然なのです。が、表面的な繕った存在のように思えてならないのです。振興会の皆んなは、どう捉えているのでしょうか。

か？本当に認めているのでしょうか？本当に存在を認めているとしたら、もっと、障害のあるスタッフに対する言葉遣いや対応の態度は、もっと、人格を尊重したものにしたいです。事業などで適材適所のように見えながら、実際には隅に追いやるようなことにはならないのではないのでしょうか。

障害のある人々に関連する仕事に従事するスタッフも多いのに、誰も気がつかないのか、こんな基本的な問題があるのに、誰一人声を出さない。障害のあるスタッフからも...

障害のあるスタッフの一人達にも言いたい。自分達のための活動を、何故、人に委ねるのですか。スタッフのユニホームを着て座っているだけで満足しているのですか。自分の思いや考えもあつて、振興会の活動に参画してきたのでしょうか。だつたら、振興会立脚の理念を咀嚼し、リーダーとしての信念を持って、リーダーとして力を発揮し得るよう、自らを成長させて欲しいものです。

行事予定

8月	24(日)	第28回全京都障害者総合スポーツ大会	京都市障害者スポーツセンター	来月の つどいは 9 / 14 第2日曜日
		水泳大会		
	城陽障害者スポーツのつどい	サン・アビリティーズ城陽		
9月	7(日)	第24回全京都車いす駅伝競走大会	丹波自然運動公園・周辺道路	
		第18回ミニ駅伝競走大会		
	9(火)	丹波障害者スポーツのつどい	丹波自然運動公園	
京都障害者スポーツ振興会ホームページ TEL/FAX075-712-7010 http://web.kyoto-inet.or.jp/people/spo-shin/ (7月21日に一部更新)				